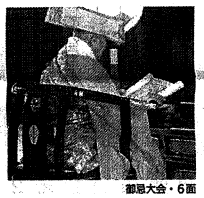
文化時報

株式会社 文化時報社
発行所・〒600-8243
京都市下京区猪熊通り塩小路下ル
電話(075)371-0159
FAX(075)371-5803
info@bunkajiho.co.jp
購読料（送料共）
1部300円 1カ月2,450円(半年または年間)

TOPICS

縄目地蔵 開眼――3
GWに祈りの鐘――7
〈新紙面〉
経済 コロナを越えて――5
ふつうじょうほう――8

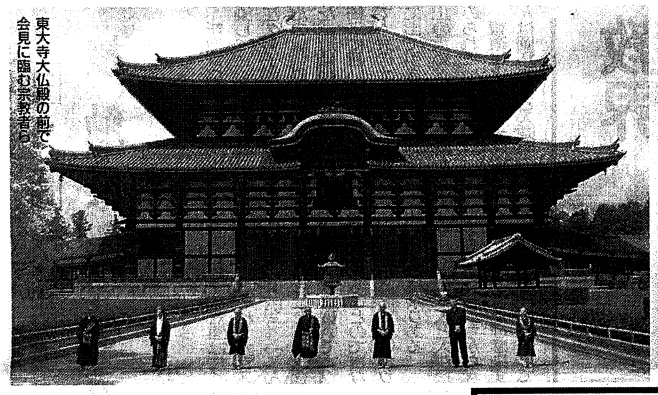


都忌大会・6面

曹洞宗瑞岩寺

コロナ禍、Zoomで中継も…
"ネット法要" 万能か

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、法要や行事をインターネットで中継する寺院が増えている。テレビ会議システム「Zoom（ズーム）」を利用して法要の同時配信を始めた曹洞宗瑞岩寺（群馬県太田市、長谷川俊道住職）もその一つ。法事の新たな選択肢として複数のメディアが報じたが、長谷川住職の真意は"ネット法要"の普及ではなかったという。（安岡遥）



東大寺大仏殿の前で、会見に臨む宗教者ら

施主がスマホ撮影

瑞岩寺の広い本堂には、長谷川住職と施主の姿のみ。粛々と読経する長谷川住職を、施主がスマートフォンで撮影し、「Zoom」を通じて配信する。自宅から見守る親族が、画面越しに手を合わせた。

感染拡大の影響で、通常は月に10件ほどある法事の依頼が大幅に減少した。移動中の感染を懸念して遠方の親族を招くことができず、施主と2人だけの寂しい法事になることもあったという。

長谷川住職は、普段から会員制交流サイト（SNS）で檀信徒と交流するなど、ネットに明るい。「遺族にとって法事は大切な節目。お寺に来られなくても参加できれば」との思いから「Zoom」の利用を提案し、これまで数件の法要をネット配信した。

新型コロナウイルス感染症の有効な治療法の確立には1年以上を要するといわれる。長谷川住職は「お寺にとっても1～2年は厳しい状況が続く」と予測し、「宗派や政府の対応を待っていては遅い。さまざまなツールを駆使し、臨機応変に対応すべきだ」と話す。

「仏さまに失礼」

長谷川住職は、コロナ禍の終息後も、離郷檀信徒の入院中の高齢者を対象に「Zoom」の活用を検討している。親族全員が地元で暮らしていた時代と違い、今は法事で集まるのも容易ではない。お寺に来られない事情のある檀信徒の選択肢になれば」。施主からの希望があれば、今後も同時配信を受け付ける見通しだ。

だが、課題は多い。スマートフォンやパソコンに不慣れな高齢者にとっては、「Zoom」のハードルは高い。「大切な法要を撮影で済ませるなど、仏さまに失礼ではないか」と戸惑いの声もあるという。

対面の法要でしか得られない経験もある。「遺族の悲しみは、体を動かすことで少しずつ癒やされていく」。供花や供物を買いに出掛け、お寺に足を運ぶという行為を促せば、法要もグリーフ（悲嘆）ケアになる。長谷川住職も「私自身、遺族とじかに顔を合わせることで、心が通じ合う」と語る。

今できる最善を

ネット法要は選択肢を増やすが、実際に集まって行う法要の良さはなくなる。長谷川住職は「現状ではネット法要が最善だが、いつでも誰にでも通用する万能の策ではない。選択肢の一つではあっても、普及させたいという思いは一切ない」と断言する。

その上で、コロナ禍の終息後には「法要を行う必要があるのか、そもそも宗教の存在意義は何なのか、ということが改めて問われる」と指摘。「諸行無常というお釈迦さまの教え通り、予想すらしなかった事態が今後も必ず起こる。宗教者に必要なのは、そのときにできる最善のことを選択する力だ」と強調した。

東大寺呼び掛け、超宗派で
終息願い正午の祈り

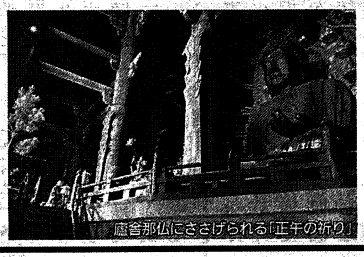
新型コロナウイルスの終息を願って毎日正午に大仏殿で祈る華厳宗大本山の東大寺（奈良市、狭川普文別当）の取り組みに、宗教・宗派を超えた宗教者らが賛同している。高野山真言宗（和歌山県高野町）も5月3日から参加すると表明。それぞれの場所で時を同じくして祈りをささげ、全国の人々と思いを共有する。

東大寺は752（天平勝宝4）年から1250年以上にわたり、鎮護国家を願う修二会（しゅにえ）を営んできた。今回の正午の祈りは4月1日に開始。狭川別当は「周りの人、目に見えない人の命を守るためには、行動を慎むことが重要。皆さんと一緒に祈り続けたい」と呼び掛けており、全国から共感の声が寄せられている。

4月24日には東大寺大仏殿で記者会見が行われ、高野山真言宗、金峯山修験本宗（奈良県吉野町）、カトリック大阪教区（大阪市中央区）、手向山八幡宮（奈良市）、圓照寺門跡（同）の代表者ら7人が参加。それぞれの思いを語った。

高野山真言宗の添田隆昭宗務総長は「弘法大師さまは『虚空尽き、涅槃（ねはん）尽き、衆生尽きなば、わが願いも尽きなむ』と、最後の一人まで救いたいと願った。私たちの祈りで人々の元気をかき立てられれば」と祈りの原点に回帰。

呼び掛けにいち早く賛同し、4月3日に護摩供を勤めた金峯山修験本宗の五條良知管長は「場所が違っても、時同じくして同じ思いで祈れば心が強くなる。『万民安楽、みんなようなれ』と、多くの人々に協力を求めた。



唐招提寺で「正午の祈り」

開かれた寺 どう実現
真宗大谷派・明永寺
調紀住職に聞く（上）

真宗大谷派の元宗議会議長、調紀（しらべ・おさむ）明永寺住職（80、福岡県八女市）が今年、住職を退く。生まれ育った大分県臼杵市の善法寺から入寺して55年。8期32年務めた宗議会議員の引退後は、市民文化事業への協力を通して、地域活性化に尽力してきた。「開かれた寺」を模索し続けてきた調住職に、寺院や宗門の今後に対する思いを尋ねた。

（編集委員 奥野武志）

調紀住職

福岡県南部にある人口約6万2千人の中核都市、八女市。味わい深い八女茶や和紙・竹細工などの伝統工芸品で知られてきたこのまちに、著名な音楽家らが公演に訪れるホールがある。市民会館「おりなす八女」だ。

調住職は、2011年に同館が完成する前の企画段階から関与。今年4月には会館を運営するNPO法人「おりなす八女文化事業振興会」の理事長に就任した。音楽を中心にしたまちおこしに、寺院が関わるという画期的な取り組みだった。

4面に続く

新紙面スタート

6日号休刊のお知らせ

5月6日(水)号は休刊させて頂きます。

株式会社 文化時報社

きょうの標語

鳥は飛び方を変えられないが、
人間はいつからでも
生き方を変えられる。

――医師、日野原重明
（1911～2017）

・文化時報は、人生の道しるべとして、時代の半歩先を読む宗教専門紙です。
・文化時報は、健全な経営を行い、こころの時代にふさわしい良質な紙面を作ります。
・文化時報は、従業員一人一人が高い専門性と広い視野を持ち、宗教界の発展に貢献します。